==========

クラン・コラ Cran Coille：ケルト・北欧音楽の森

Editor : hatao　　November 2019 Issue No.305
ケルトの笛屋さん発行　　http://www.celtnofue.com/
==========

クラン・コラは月に２回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

(1)現地レポート　新興市場中国のティン・ホイッスル事情　後編
ケルトの笛 hatao

(2)自分のための音楽2　field 洲崎一彦

(3)私とケルト音楽
第五回：プランクトン プロデューサー是松渓太さん
天野朋美

(4)Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その24　大島 豊

(5)編集後記　hatao

■(1)新興市場中国のティンホイッスル事情　後編
■　hatao

前編では、中国という閉じられたマーケットで花開くティン・ホイッスルの独特な文化について紹介した。

今回は、中国のティン・ホイッスルの現状と今後の展望について、ある一人の商人との出会いから、まとめたい。

私が中国のアイルランド音楽コミュニティと関わるようになって10年近くになる。広大な国土と巨大な人口を抱える中国だが、アイルランド音楽のファンは少なく、北京、上海、重慶、成都などの巨大都市に多少の愛好家がいる程度で、あとは各地に散在している。セッションができるほどの人数がいる場所はごく限られている。そのため、愛好家たちはSNSのグループを通じての交流が盛んだ。中には、長年知っているものの会ったことがない仲間も多い。

これは、楽器職人や商人にとっても同じ状況である。前編で紹介したガレオンを代表に、中国には個人でティン・ホイッスルやアイリッシュ・フルートを製作する職人がいくつか存在し、当然お互いのことは認識しているが、商売が関わるだけに、状況は純粋な愛好家ほど無邪気なわけにはいかない。

中国のアイルランド音楽コミィニティに出入りしていると、私もそれなりに知名度が上がり、「hatao老師(中国語で先生の意味)」と慕ってくれて、色々な方から連絡を頂いたり、海外の留学先で会えたりという機会がある。

そんな中、今から4,5年前に青島から私のコンサートにはるばる来てくれた若い楽器商人がいる。名前をエル氏とする。

彼は中国最大のECサイト「淘宝網」でティン・ホイッスルを販売する楽器商だ。最初に出会ったときは、彼が中国の工場に作らせた、アメリカの銘記Sindt whistleによく似た外見のティン・ホイッスルと、高級そうな喫煙具をプレゼントされて、タバコを吸わない私は面食らった。彼としては、私に中国語のティン・ホイッスルの教材を作り、アイコンとして彼の商品を宣伝してほしいという意図があったようだ。

今回の訪中で再びエル氏が青島から私を訪ねてきてくれたので、食事をしたり買い物に付き合ってもらいながら、話を聞くことができた。ここに書くのはご本人の承諾を得たインタビューの内容だ。

エル氏は教育学部で学問を修め、卒業後にいくつかの会社で働いたのち、2011年に北京でティン・ホイッスルの卸業者を始めた。「本当は音楽教師になるはずだった」と言う。
商売を起こすにあたり、中国では商標権を取得しなければ販売できないルールがあるのか、Feadogの中国での商標をかなりの大金で買い取り、独占販売契約を結んだ。
最初は一人で商売を始めたが、順調に成長し、現在はEC担当スタッフが2名いる。自身は家庭の事情で故郷の青島に戻っている。主な取引先は中国各地の楽器店で、商売は右肩上がりで年間数百ケースを出荷するという。
他の主な取引メーカーはGene Milligan, MK whistles, Susato, Chris Abell, Shaw, Goldieだ。

エル氏によると、中国では他にもいくつかのティン・ホイッスル商人が

おり、販売権を巡ってはしばしば争いになるという。例えば、ある中国業者が海外メーカーにメールを出し、エル氏が質の悪い模造品を作って販売していると告発する。メーカーとしては、誰を信用してよいのかわからなくなり、販売権を停止する…といった嫌がらせを受けたとのことだ。ティン・ホイッスルを量産するメーカーにとって中国市場は魅力的に違いないが、常にリスクもあるということである。

人気の海外メーカーは他の業者からの嫌がらせもあるので、そこでエル氏は国内生産のシェアを伸ばそうとしており、いくつか試作品を作って見せてくれはするのだが、何ぶん本人が音楽家ではないので、品質については閉口せざるをえない。プラスチックの素材の質が見るからに悪く、おそらく楽器に不向きな、玩具や容器に使うような軽い素材のプラスチックを使っているのだろう。

音楽家としての感想を正直に言うと、それでも良いのだという。仮に品質が悪くても、安く、そこそこの見た目の楽器を作れれば、国内ではそれなりに売れる。なるほどあっけらかんとしている。上海の国際楽器見本市でも、そういった楽器をいくつか見たことがある。

こうした考え方は、私としては残念に思う。ティン・ホイッスルの真価が認められるためには、良い演奏者とともに、良い楽器職人の存在が不可欠だ。品質の悪い楽器が出回ることは、結果的には文化の成熟にはマイナスの影響を与えると思う。

そんな折、四川・成都の楽器職人から2本のティン・ホイッスルが届いた。会ったことも聞いたこともない職人だったのでまったく期待せずに試奏してみたのだが、作り方、演奏性能ともに非常に完成度の高い楽器で驚いた。

中国のティン・ホイッスルはまだ黎明期。この玉石混交、混沌とした現在の中国市場から、良い楽器を求める人々が増えて、さらに良い楽器職人が育つことを願っている。

ケルトの笛 hatao

■━━━

かと急に不安になってそれらの一部を読んでみたのでした。
　すると、今から考えると、私の考え方もほとんど整理されておらず、言葉足らずなことばかり吼えていたのだなと赤面の至りなのですが、一部はなかなか面白いことも話していたのです。

　いわく、
　「アイルランド音楽の根本はブルース（哀歌）である」
　「生きる苦しみを歌ったもの、というよりは、その苦しみを乗り越えるためにこの音楽が必要だった」
　「つまり、楽器を演奏するのは自分のためであって、誰かに聴かせるためではない」
　「現に、少し前の時代には、アイルランドにはアイルランド音楽の職業音楽家は存在しなかった」

と、まあ、当時、私はこんな講話を垂れていたわけです。
　また、えらそうな事を知った顔で吼えていたものです。今考えると、アイルランド音楽はこれが全て！という強い断言はちょっとどうかな？とも思うのですが、この辺りの事は、ここ最近のクランコラ誌上での私の話題にちょっと関係してくるぞと思いました。

　数回前の原稿で、私は、日本人演奏者は、特に初心者の人達はセッションなどで音を出すのにびびり過ぎているのではないか、というような事を書いたと思います。
　ここですね。あくまで自分の為に演奏するのだ。人に聴いてもらう為ではない！　とすると、びびる必要なんてどこにも無いのですね。ただ、このあたりの、びびるという心理的な側面は色々な要素が絡み合っていて、前にも書きましたが、それこそ、西洋と日本の文化の違いにも根ざしているもので、深入りすると、やたら込み入った考察になってしまう所なのですが、ここは、シンプルにただ、「人に聴かせるために演奏するのではない」「自分のために演奏するのだ」と考えるだけで何かすっと腑に落ちるものはないでしょうか？

　結局、この事は、ジャズのルーツが黒人哀歌、つまり、虐げられていた黒人労働者のブルースに端を発していて、それが、現在のポップな流行音楽にまで繋がっていることを思うと、現在のポップスの元になっている音楽も、元々は自分の為に演奏していたものなのだということが言えますね。

　これが、いつしか、聴いている人がチップなどのお金を払うというような事態が発生して来てですね、それが、商売として成立して行った果てに演奏会が行われ、ラジオが発明され、レコードが発明されて、音楽は巨大な商品になって行くわけですね。

　人がそれを聴きたいという需要があって商品として確立されるわけですから、いつしか、音楽は自分の為に演奏するものではなくなってしまうのも仕方があり

ません。現在では、普段、耳にする音楽は、ほとんど全てが商品としての音楽なのですね。

　今の時代は、皆さんそれに憧れて、それを模倣して、楽器の練習に励むのですから、知らず知らずのうちに、音楽という商品、の練習をしてしまっていることになります。

　だから、特に演奏に自信が無い初心者の皆さんは、さあ、皆の前で1曲弾け！と言われた時に、自分の演奏には商品価値なんて無い！と、反射的に身構えてしまう。だったら、演奏しなければいいのですが。。。

　そこは、恐らくこの音楽の持つ元々自分の為に演奏するという根源的なパワーみたいなものが演奏者の潜在意識に知らないうちに刻み込まれているとでも申しましょうか。そういう演奏欲というものもムラムラとわき起こる。そこに、人目を必要以上に気にする日本古来の集団意識が加味されて、彼は立ち往生してしまうのではないか。こういう事が起こっているのではないでしょうか。

　対して、欧米の皆さんは、人目を気にしないという部分だけではなく、この、根源的な演奏欲と言った潜在意識が恐らく私達が考える以上に強力なのでしょう。この音楽の持つ根源的なパワーみたいなものをもっとダイレクトに受け取めている。そういう部分があるのではないかと思いました。

　だから、私達日本社会に生きる音楽好き人間は、もうあまり、ややこしい事を考えるのはやめて、音楽は人のために演奏するのではなく自分のために演奏するのだ！この台詞だけをただただお題目のように朝晩唱えるのが近道かもしれません。これによって、どんな状況に立たされても、その時の自分を最大限に表現する音楽が演奏出来るのではないでしょうか？

　ここで、自分の演奏は自分のためにやっているのであって商品力など無い！と強く意識してしまうと、ライブハウスでチャージを取ったり投げ銭でお金をいただくような演奏って出来ないではないですか！　という声も聞こえてくるかもしれません。

　が、ここでの商品力は自分が決めるのではなくて、聴衆が決めるのですから。初心者の初々しい演奏を好きだという方もおられるだろうし、上手いヘタではなく何々君の演奏が好きだという方もおられるでしょう。ここは、まわりの皆さんの判断にゆだねてしまいましょう！

　そうですね。何ちゅうか。楽器を弾くにおいて、良い意味での軽さというか無責任さというものにも注目してみる必要がありますね。

す

■――――――

今、あの世代以降のバンドはとても元気ですよ。

—今までのトラッドミュージシャンとどんな違いがあるのですか？

是松：現代とどう繋がるか、人をどう楽しませるかという２点を考えている所です。

トラッドミュージシャンの中には保守的な人も多いのですが、ウィ・バンジョー・スリーは如何に自分たちの音楽をより多くの人と楽しむかという事をすごく考えています。例えば、彼らは日本に来て６０分リハーサルの時間があれば、２０分でサウンドチェックを終わらせて、あとの４０分はオーディエンスと体験を通して繋がるために日本語の勉強をしているんです！　人によっては彼らの音楽を「これはアイリッシュじゃない！」と言う人もいます。今回のアルバムなんて全曲オリジナルですしね。だけど、トラッドかどうかなんて問題じゃなく、トラッドから受け継いできた精神がそこにあればいいんです。

彼らのようなバンドは増えていて、観客を楽しませながら、自分達でも新しい表現を作っていく。今鳴らすべき音はなにかという所に真剣に向き合っていますね。

ひと昔前のロックとトラッドを組み合わせた楽曲は強引な印象のものも多かったけれど、ようやくその両者をごく自然に聞いてきて融合できる世代になってきて、クオリティも高いものが作れるバンドが出てきたんです。昨年ケルティッククリスマスに出演したイースト・ポインターズは以前よりもっとロック方面に振れていて、すごくかっこいいです。

彼らは博物館的では無いやり方で伝統を受け継いで、それぞれのバンドが自分たちの持ち味を最大限に発揮して、トラッドというものを現代に鳴らそうとしているんです。日本のミュージシャンの皆さんにはぜひ彼らの音楽に触れてもらって、新しい音楽の形を生み出してほしいですね。

〇セッションパーティとアフターパーティは激レア！

—出演者とセッションできる機会があると伺いましたが本当ですか!?　すごい！

是松：ありますよ！　よこすか芸術劇場コンサート終演後のアフターパーティのことですね。今年は12月1日(日)ですので、ぜひ楽器を持って参加してください！　この前のチーフタンズの横須賀公演の後にも、会場のロビーに100人位集まってセッションしましたよ。パブのセッションみたいに、何も決めないでみんなで音を出すんです。

セッションパーティは2種類あって、もうひとつは12月2日(月)に東京の青山で行

われる前夜祭ですね。それは観客参加型ではないのですが、ケルティッククリスマスの出演者が即興で演奏したり、本編では見れないような事を体験できます。

—ロビーパフォーマンスの日本のコーラスグループ“ANONA”も気になります！

是松：ANONA（アノナ）はアヌーナの音楽が好きな人たちが集まったカバー・グループです。夏にはアヌーナのサマーキャンプに参加したり、楽しみながら積極的に活動している人たちです。現地ミュージシャンと日本のミュージシャンの交流も大事だと思っていて、価値観の共有ができたらいいなと考えて声を掛けました。チーフタンズの公演にも出演してもらったんですが、メンバーも喜んでいましたよ。

○映画「クイーン・オブ・アイルランド」の上映会もあります！

—LGBTがテーマという事で…かなり気になります！　映画の見どころを教えてください。

是松：アイルランドは2015年に国民投票で同性婚が合法化した世界初の国となったんですが、この映画はその国民投票のキャンペーンで先頭に立ち活動した“パンティ”と名乗るドラァグクイーンのドキュメンタリー映画です。LGBTの権利を国民投票で勝ち取るというのは、カトリックの世界ではありえない位すごい事です。

—主人公の“パンティ”は歌舞伎町に住んでいたのですか？

是松：そうなんです。アイルランドでは1993年まで同性愛は犯罪とされていたので、主人公の“パンティ”ことオニールは東京に理想郷を見つけました。だからある意味、日本という国もすごいですよね。

アイルランドの人々は全体の中で自分たちがそれぞれ生きているという、一神教ではないケルト的な考え方も持っていて。そういうがあると、あんまり他の人のことが気になりすぎないんです。世の中にはいろいろなものが渦巻いて、連鎖して……そういう世界の捉え方をしているアイルランドだったからこそ、LGBT の権利を国民投票で勝ち取るという素晴らしい事ができたんでしょうね。
ぜひこの映画の中で、アイルランドの美徳を感じてもらいたいです。
（おわり）

お話を聞けば聞くほど行きたくなるケルティッククリスマス2019！　素晴らしい出演者はもちろん、セッションパーティや映画の上映まで、内容盛り沢山ですね。気になる方はぜひチェックしてみてください。

＜公演日程＞

11/30（土）福井県立音楽堂 ハーモニーホールふくい
出演：シャロン・シャノン/ タリスク
12/1（日）神奈川・よこすか芸術劇場
出演：シャロン・シャノン/ ウィ・バンジョー・スリー/ タリスク
★終演後アフター・パーティー開催！！
12/3（火）東京・晴れたら空に豆まいて タリスク単独公演
12/3（火）大阪・ザ・フェニックスホール シャロン・シャノン単独公演
12/4（水）大阪・梅田クラブクアトロ ウィ・バンジョー・スリー単独公演
12/5（木）東京・渋谷クラブクアトロ ウィ・バンジョー・スリー単独公演
12/7（土）長野市芸術館メインホール
出演：シャロン・シャノン/ ウィ・バンジョー・スリー/ タリスク/ クリスティーン・カー
12/8（日）東京・すみだトリフォニーホール
出演：シャロン・シャノン/ ウィ・バンジョー・スリー/ タリスク/ クリスティーン・カー
★同日開催・小ホールにて映画上映、公開インタビュー＆トークショー
＜セッション・パーティ＞
12/2（月）東京・CAY（青山）
出演：シャロン・シャノン/ ウィ・バンジョー・スリー/ タリスク ほか

【Profile】
ゲスト：是松渓太（これまつけいた）
プランクトン／プロデューサー　http://plankton.co.jp/xmas19/

インタビュアー：天野朋美（あまのともみ）
ケルトを愛するシンガーソングライター、やまなし大使。
2019.11.9セカンドアルバム”Songs for
Braves蕾の目覚めを信じて“をリリース
https://twitter.com/ToMu_1234

■――――――

ねることが必要だ。アーティキュレーションや力をこめずに延ばすところ、フレーズの切れ目で低く小さくまとめるところ、わずかに音をはずすところ、など、細かいが重要なポイントを余裕をもって押える。恵まれた才能が真摯な努力を重ねて達した境地。ここが終着点であるはずはないが、一つのポイントではある。

17.Nita Conley Korn & Eileen Korn Estes, The Apple Tree Project, 2015, 5:16, MD, CD Baby

　Nita Conley Korn は Nita Conley の名義で、アメリカの1980年代のアイリッシュ・バンド Celtic Thunder の初代ギタリスト＆シンガー。ワシントン、Ｄ.Ｃ.をベースにしていたこのバンドは当時のアメリカで最も質の高い音楽をやっていた。Solas はその衣鉢を継いだと言ってもいい。Eileen Korn Estes の方は情報が見当らないが、名前からしておそらくはニタの娘だろう。

　ニタ・コンリーはボストン郊外の生まれで、アイルランド系の両親、とりわけ母親からアイルランドの歌の伝統を受け継いだ。クラシック音楽の訓練を受け、スコットランドの伝統音楽も学んでいる。シンガーとしてはＢ級ではあるが、歌への愛と唄うことへの愛にあふれる。ハスキー・ヴォイスも幸いして、歌の好きなおばさんが大好きな歌を懸命に唄うのは、伝統歌のレゾン・デートルをあらためて訴えてくる。シンガーとしてはドロレスの叔母、セーラとリタのケーン姉妹、コークのティム・ライオンズ、それにパディ・タニーがお手本。ハマる歌をうたわせると無二の魅力を発揮するのも伝統らしい。この歌は、ちょっとずれる。

18.Almost Irish with Chris McMullan, Live In Concert, 2017, 4:51, Denmark

http://www.almost-irish.dk/
　デンマークの４人兄弟のバンドにノーザン・アイルランド、タイローン州のストラバーン出身のパイパー、ホィッスル・プレーヤーが参加してのライヴ盤。５作めで最新作。

　デンマーク南西部 Holsted 出身の兄弟は両親の影響でアイルランドやブリテンの伝統音楽に幼ない頃から親しみ、長じて音楽学校に進む。しかし、クラシックには行かずにアイリッシュ・ミュージックを演奏するバンドを組んだ。デンマークはおそらく大陸で最もアイリッシュ・ミュージックの演奏が盛んと言ってもいいだろう。ファンも多く、歴史もある。T!)nder のフェスティヴァルは1980年代からアイリッシュ・ミュージシャンが大挙して出演している。アイリッシュ・ミュージックが好きなことでは、ドイツ人も負けていないが、演奏となるとデンマークの方が一歩先を行っている。

　クリス・マクマランとはそのドイツのフェスティヴァルでのセッションで出会

い、意気投合してコラボするようになった。マクマランにはソロもある。

https://chrismcmullan.bandcamp.com/releases

　リード・ヴォーカルは詞の各行の末尾をきっぱりと唄いきって、うたい放つスタイル。ヴァースの後半やコーラスではハーモニーをつける。そうするとクランシーズ〜ダブリナーズ・スタイルにも響くが、細部のアレンジと楽器演奏の腕はやはり現代のもの。ヨーロッパ大陸らしい洗練されたセンスもあって、アイルランドや北米とは一味違っている。この洗練されたセンスはクラシック音楽を生んだものでもある。一方でアイリッシュ・ミュージックは勢いよく演奏するのが身上と思っているところもあるらしく、ビートのカッティングなどはどちらかというと粗い。二つの相反する方向から生まれるアンビヴァレンツな効果はちょっと面白い。

　アルバム全体ではアイルランドよりもテンポを落として、丁寧に演奏する。プランクシティそのままの〈Raggle Taggle Gypsy > Tabhair Dom Do Lambh〉も意外に面白い。〈Skibbereen〉は通常の半分ほどのテンポで、この歌はこんなに良かったかと思わせる。

Lukas Nielsen: Vocal, Fiddle, Mandolin
Rasmus Nielsen: Vocal, Cittern, Bouzouki, 5 str. Banjo
Alexander Nielsen: Vocal, Whistles, Guitar
Jacob Nielsen: Guitars, Concertina, Bones
Chris McMullan: uillean pipes, whistle

19.Colleen Raney, 2013, 5:22

　アイルランドやブリテンのうたい手の歌は、感傷を排しながら、あっけらかんとドライなわけでもなく、聴きようによってはあまりにクールで「ねーんげん」的ではないと聞える。
うたい手がその存在を主張しない。アメリカのうたい手は突き放しながら、どうしても感情がこもってしまうところがある。否応なく個性が出ざるをえない。それがうまく出ると、良い感じの割合で感傷が溶きこまれて、すなおに耳になじむ。その点、コリーンの歌唱はあくまでもアメリカンの歌唱でありながら、アメリカの他のシンガーとは一線を画して、感傷も感情も皆無と言えるまでに抑制が効いている。アメリカンとしては限りなく硬質で、そう簡単に耳になじんでくれない。それはヨーロッパとアメリカの中間というよりは、アメリカ人として伝統歌を唄うことをとことん尽きつめた、究極のアメリカンにぼくには聞える。むろんこれが唯一の究極ではなく、例えば Connie Dover は別の方向で究極だ。ただし、コリーンの向かうところは孤高の道ではある。二度や三度聴いたくらいでは、その歌の真価はたぶんわからない。状況や環境を変えて、何度も聴いているうちに、ふとハマる時が来るのを待つ、というのが、最も

適切なアプローチだろう。

　これまでの彼女のアルバムでは Colm MacC!)rthaigh との共作 Cuan が最も成功しているのはそのためでもあるだろう。最新作はあえて伝統歌を除いて、同時代のオリジナル曲をとりあげて、新たな境地を開いている。それについては次回から聴いてゆくが、アメリカ人でありながら、エモーショナルにならずにどこまで歌の感情をそのまま伝えられるかにこだわるこの姿勢は、最新作でついに実を結んだ。

　間奏はフィドルとアコーディオンがメロディをほぼなぞる。

　後にフィドルとアコーディオンでリール。ユニゾンだがフィドルはオクターヴ低い。ヴィオラかと思うほど。このフィドラーは Anam にも一時参加し、ハーモニカの Mick Kinsella とデュオを組み、また Emer Mayock、Donal Shiggins、Lasairfh!)ona N!) Chonaola と The Listners というバンドをやっている。この名前のアコーディオン奏者はたくさんいて、判断がつかない。

Colleen Raney: vocals
Aidan Brennan: bouzouki, guitar
Johnny B. Connolly: accordion
Steve Larkin: fiddle
Trevor Hutchinson: bass
Dave Hingerty: drums, percussion

　この曲の録音としてはやはりディック・ゴーハンが傑出しているが、名曲名演を生むの諺の通り、どうしようもないレベルのものは無い。というよりも、どれも独自の聴き所を備えている。カーラ・ディロンやオールド・ダンス・スクール、ローズ・ロクラン、スーザン・マキュオンあたりは、一聴なるほどと感じ入ることができよう。あとは好みだが、好みというものも案外にころころ変わるものだ。コリーンの歌唱はその中でもやはり際立っている。ではあるが、その個性の強烈なことはわかりにくい。それだけに、一度気に入れば、おそらくずっと気に入ったままだろう。

　アルバム全体が向かう方向はコリーンが目指す方向と必ずしも一致していない。どちらかといえば伝統歌よりもオリジナル曲の方がうまくいっているように思える。この流れが次作で花を開くことになる。ひょっとすると、伝統歌を唄うときには、どこかに余分な力が入ってしまうのか。伝統歌に備わる慣性に拮抗しようとする姿勢になってしまうのか。真向から抵抗しようというよりは、歌の流れの方向を変えようとする。あるいはうたい手がこちらに向かっていると思う方向が、本来の流れからはわずかにずれているのか。〈The Cruel Brother〉に代表されるように、試みとしては面白く、かなりのレベルにまで達しているのだ

が、本当に良いものになる一線にほんの少し届かない。

　これを失敗と呼ぶのは酷ではあるだろう。失敗しているとしても水準の高いところで失敗しているので、場合によって、聴き方によって、別の様相を見せる可能性はある。とはいえ、ここでの体験があって、次のアルバムでの突破がなしえたことも確かだ。

　次回からはコリーンの最新作、昨年８月に出た《Standing In Doorways》を聴いてゆく。これも前作と同じく、アイルランドはダブリンのトレヴァー・ハッチンソンのスタジオでの録音。プロデュースもトレヴァー。（ゆ）

■――――――――――――――(5)編集後記――――――――――――――――――■

　大阪では毎日、温かい秋晴れが続いています。日本の晩秋は美しいですね。街では早くもクリスマス・ソングが響いています。楽しみなコンサートがめじろ押しのこの冬。音楽とともに暖かくお過ごしください。

　当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、 毎月の連載形式でも結構です。 ご応募に際しては、

・CDレビュー
・日本人演奏家の紹介
・音楽家や職人へのインタビュー
・音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は　info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますのでご利用下さい。

https://celtnofue.com/community/event/

★全国のセッション情報はこちら

https://celtnofue.com/play/session_info.html

★全国の音楽教室情報はこちら

https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html

=-=-=-